

The National Conference of Community Cinemas 2009 in Kawasaki

全国コミュニティシネマ会議 2009 in Kawasaki

2009年9月4日(金)・5日(土)

会場:

■川崎市アートセンター

神奈川県川崎市麻生区万福寺 6-7-1

Tel: 044-955-0107 HP: <http://kawasaki-ac.jp>

■新百合トウェンティワンホール

神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-2-2 新百合 21 ビル B2

Tel: 044-952-5000 HP: <http://shinyuri21hall.jp>

いずれも小田急線「新百合ヶ丘駅」下車、徒歩3分(添付会場案内図参照)

参加費:

会議 2,000 円

※ 9月4日、5日共に参加可。一部のみの参加も同じ。映画上映は含まれません。

※ 川崎市在住の団体・個人は会議のみ無料(申込・お問合せは川崎市アートセンターまで)

※ 定員 200 名

レセプション 3,000 円

映画上映 1 作品 1,000 円(山中貞雄シンポジウム+映画上映はセットで1,000円)

主催:財団法人 川崎市文化財団/一般社団法人コミュニティシネマセンター

共催:川崎市/川崎市アートセンター/「映像のまち・かわさき」推進フォーラム/NPO法人 KAWASAKI アーツ/
日本映画学校

協力:昭和音楽大学/東京国立近代美術館フィルムセンター

後援:「しんゆり・芸術のまちづくり」フォーラム

支援:文化庁 平成 21 年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

申し込み締め切り 8月28日(金)

参加を希望される方は、別紙の申込用紙にご記入の上、

8月28日(金)までにファクシミリ(FAX.03-3461-0760)にてご送付ください。

ご出席申し込みに対しては、折り返し確認書をお送り致します。

※ 内容(出演者等)は変更になる場合がございます。ご了承ください。

※ 定員を越えた場合、お申込を受けられない場合がございます。ご了承ください。

お問い合わせ

コミュニティシネマセンター TEL:050-3535-1573 FAX:03-3461-0760 <http://www.jc3.jp>

政策の中の「映画」・・・

今年の全国コミュニティシネマ会議のテーマは“政策の中の「映画」”です。

少し固い感じがしますし、確かに固い内容も含まれているわけですが、とても大切なことであり、無関心ではいられない、身近なことでもあります。

2001年に文化芸術振興基本法が成立し、映画はメディア芸術のひとつとして位置づけられ、映画振興に関する新たな施策がスタートしました。

これらの施策はコミュニティシネマの活動にも影響を与えてきました。

しかし、何が施策を決めるのでしょうか。見方を変えれば、コミュニティシネマの活動が、これらの施策の成立に大きな影響を与えたということもできるでしょう。

コミュニティシネマや映画館を取り巻く状況は変化し続けています。

間近に迫っている映画館のデジタル化はさらに大きな変化をもたらすことになるのでしょうか。

「地域」を取り巻く環境も変化しています。まちづくりや都市計画も、「政策」の一部であり、コミュニティシネマとは深い関わりがあり、深く関わっていく必要があります。

会場は、「映像のまち・かわさき」を標榜する川崎市で、“公設の映画館”として積極的な活動を展開している川崎市アートセンターです。

基調講演は、アジア初の国際フィルム・アーカイブ連盟会長に就任された岡島尚志氏にお願いします。国の文化政策はフィルムの保存にとって非常に重要な意味をもっています。

2003年にコミュニティシネマ支援センターの活動がスタートして5年、

この4月に一般社団法人コミュニティシネマセンターとして、新たな一步を踏み出しました。

この機会に、政策と映画の関係を、改めて考え直してみたいと思います。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

「全国コミュニティシネマ会議」は、

さまざまな場で“映画を見せること”を行っている人々の情報交換と研究討議の場として、1996年から毎年開催されているものです。主に映画祭関係者、公共ホール・美術館・図書館の映像担当者、自治体の文化事業担当者、シネクラブの主催者、ミニシアターを中心とした興行関係者、自主上映団体、独立系配給会社等々が集まります。映画の上映に興味のある方ならどなたでも自由にご参加いただけます。

プログラム

※出演者等は変更になる場合がございます。ご了承ください。

9月4日[金]

会場：新百合トウェンティワンホール [多目的ホール]

13:00-13:10 主催者挨拶

13:10-13:30 コミュニティシネマセンター活動報告

■13:45-14:45 基調講演

国際フィルム・アーカイブ連盟会長就任記念講演 「アーカイブと映画上映の未来（仮）」

岡島尚志 [東京国立近代美術館フィルムセンター主幹/国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会長]

70 を越える国々から 150 近いフィルム・アーカイブが加盟する国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF/フィアフ)。この国際機関は、1938 年の創設以来、70 年以上にわたり、世界各国にある映画保存機関のまとめ役として重要な役割を果たしてきましたが、今年 5 月、その第 12 代会長に東京国立近代美術館フィルムセンター主幹・岡島尚志氏が就任しました。アジア初の FIAF 会長の誕生は、国内外のフィルム・アーキビストにとってのみならず、映画の上映に関わる人たちにとっても大きなニュースでした。岡島氏に、映画のデジタル化が急速に進みつつあるなか、映画の保存、そして上映はどう変化していくのかを聞きます。

岡島尚志

1979 年から、フィルムセンターの上映・保存・調査・出版・国際交流事業、各種イベントの企画・運営に携わる。代表的なキュレーション番組に「ラオール・ウォルシュとその時代」(86)「知られざるアメリカ映画」(93)「日本映画の発見」(96～02)「ハワード・ホークス映画祭」(99)「韓国映画—栄光の 1960 年代」(02)等があり、2005 年より現職。国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF) の活動にも積極的に関わり、運営委員、副会長を経て、2009 年 5 月、会長に就任。アジア初の FIAF 会長の誕生となった。

■15:00-16:30 プレゼンテーション 「映画館と映像のまちづくり」

川崎市には“シネコン激戦地”といわれるほど多くの映画館があります。それに映画部門をもつ美術館・川崎市市民ミュージアムがあり、15 年の歴史をもつ KAWASAKI しんゆり映画祭が開催されています。さらに、つくりてを育成する日本映画学校があり、2007 年には公共の映画館ともいべき川崎市アートセンター（アルテリオ映像館）がオープンしました。川崎市在住の映画監督や脚本家、プロデューサーも多く、東京に隣接していることもあって映画やテレビのロケも各所で頻繁に行われています。こうした映像に関する豊富な地域資源を活かして、より魅力的なまちづくりをめざそうと「映像のまち・かわさき」推進フォーラムが設立されました。

映像・映画・映画館とまちづくり、地域と映画・映画館の関わりについて、関心が高まっています。

川崎をはじめ、各地で展開されている新しい試みを紹介します。

司会・解説：小泉秀樹 [東京大学大学院准教授、専門まちづくり]

1964 年生まれ。東京大学大学院博士課程修了。東京理科大学助手、東京大学講師を経て現職。

主著『スマート・グロース』(西浦定継と共編、学芸出版社)、編著に叢書「シリーズ都市再生」(日本経済評論社)、「まちづくり百科事典」(丸善)などがある。

[1] 「映像のまち・かわさき」推進フォーラムと川崎市アートセンター

[2] 新潟県上越市高田「街なか映画館再生委員会」

新潟県上越市にある映画館「世界館」(高田日活)は、明治 44(1911)年に芝居小屋「高田座」として建てられた、百年近い歴史をもつ貴重な建築物です。明治・大正の洋風建築を伝えるもので、今年、経済産業省の「近代化産業遺産群」にも認定されました。3 月末に所有者から建物を寄託された「街なか映画館再生委員会」、この映画館の保存再生を通して街中の活性化を目指す活動をスタートさせました。

[3] 群馬県前橋市「シネマまえばし」

2006年「テアトル前橋」が閉館したとき、前橋市は映画館のない街になりました。その後、シネマコンプレックスができましたが、街なかに映画館がない状態が続いています。前橋市の所有となり、閉じたままになっていたこの映画館を再開しようとNPO法人前橋芸術週間の人たちが動きはじめました。「シネマまえばし」は10月に開館する予定です。

[4] 埼玉県深谷シネマの新展開

NPO法人市民シアターエフが運営する映画館「深谷シネマ」は、TMO事業の一環としてつくられた映画館のさきがけとして多くの関心を集めてきました。市の区画整理事業により、移転を余儀なくされている今、深谷シネマは移転先に「旧七ツ梅酒造跡地」の酒蔵を選択。芸術・文化によるまちづくりの拠点としてより積極的な活動を展開しようとしています。

■16:45-18:15 ディスカッション 「政策の中の映画」

映画を扱う二大省庁である経済産業省と文化庁。現在の日本の政策の中で「映画」はどのように位置づけられているのかを現状と今後の展開について話し合います。

司会：堀越謙三 [コミュニティシネマセンター代表理事/ユーロスペース代表/東京芸術大学教授]

1977年よりシネクラブとしての活動を開始。1982年配給会社・ミニシアター「ユーロスペース」を設立。ヴェンダース、張芸謀、アルモドバル、カラックス、キアロスタミ、オゾンらを日本に初めて配給した。「スモーク」「TOKYO EYES」「ポーラ X」「まぼろし」など、海外との共同製作、若手監督等の作品の製作も手がける。1997年、映画美学校を開校。1998年金沢市の香林坊に映画館「シネモンド」を開館。2005年4月より東京芸術大学大学院映像研究科教授。2009年一般社団法人コミュニティシネマセンター代表理事に就任。

パネリスト：

清水功 [文化庁文化政策課芸術文化課支援推進室長]

高柳大輔 [経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課課長補佐]

川崎市総合企画局「映像のまち・かわさき」推進担当

佐々木史朗 [立命館大学客員教授/日本映画学校理事]

大学在学中に鈴木忠志、別役実などと劇団早稲田小劇場設立。1963年よりTBSテレビ演出部、東京ビデオセンター設立を経て、1979年よりATG代表として、主に新人監督の発掘とそのプロデュースをする。1993年(株)オフィス・シロウズ設立。代表作に『セボクラテスたち』(1980/大森一樹)『家族ゲーム』(1983/森田芳光)『遠雷』(1981/根岸吉太郎)『ガキ帝国』(1981/井筒和幸)『逆噴射家族』(1984/石井聰互)『ナビの恋』(1999/中江裕司)『ごめん』(2002/富樫森)『カナリア』(2004/塩田明彦)『スクラップ・ヘブン』(2005/李相白)『やじきた道中でれすこ』(2007/平山秀幸)などがある。『真夏の夜の夢』(中江裕司)公開中。

■18:30- レセプション 会場：昭和音楽大学食堂

(昭和音楽大学 テアトロ ジーリオ ショウワ見学経由)

全国コミュニティシネマ会議 2009 in Kawasaki

The
National Conference of
Community Cinemas
2009
in Kawasaki

9月5日[土]

■10:00-11:45 分科会

会場：新百合トウェンティワンホール 会議室

[1] 映画祭/シネクラブ部会 「地域における映画祭を考える～アジア映画の魅力」

日本全国で100をこえる映画祭が開催されています。アジア映画を積極的に紹介してきた主要な国際映画祭のディレクターたちに総登場していただき、地域における映画祭の意味、いま最も注目しているアジア映画の作家たち、アジア映画を上映することの意味、楽しみなど、自由にディスカッションしていただく、贅沢な分科会です。

パネリスト：

佐藤忠男[映画評論家・日本映画学校校長]/石坂健治[東京国際映画祭「アジアの風」部門ディレクター]/市山尚三[東京フィルメックスプログラム・ディレクター]/藤岡朝子[山形国際ドキュメンタリー映画祭ディレクター]

[2] シネマテーク・プロジェクト部会+映像教育部会

「映像学芸員/映像アート・マネージャーの育成・・・テキストをつくる」

昨年に引き続き、「映像学芸員」を取り上げます。公共文化施設のみならず、地域のコミュニティシネマ活動を推進するためには、専門家の育成が不可欠です。この分科会では、15年前に出版された『芸術経営学講座/4映像編』（東海大学出版会）を改訂し、新たなテキストをつくることを考えます。

パネリスト：

小川直人[せんだいメディアテーク]/川村健一郎[立命館大学准教授]/西嶋憲生[多摩美術大学教授]/松本正道[アテネ・フランセ文化センター主任]ほか

— [11:45-12:30 昼食休憩] —

■12:30-14:20

会場：川崎市アートセンター アルテリオ映像館

[3] シネマ・シンジケート部会 「映画館における“アウトリーチ”を考える」

デジタルシネマ化による、映画以外の多様なコンテンツの上映可能性が関心を集めています。映画館が、映画に限定されない芸術活動の拠点、あるいは地域のメディアセンターとして、機能を拡張することも期待されます。地域の芸術活動のセンターとして活動する先進的な美術館のあり方、公設映画館として多様な活動を展開する川崎市アートセンターの事例を聞き、映画館機能を拡大するアウトリーチ活動の可能性を探ります。

パネリスト：

堀越謙三/藤田直義[高知県立美術館館長]/野々川千恵子[川崎市アートセンター映像ディレクター]ほか

14:30 会議終了

■14:45- 映画上映 ※詳細については次ページ参照

特別企画 「生誕百年 映画監督山中貞雄」（シネマテーク・プロジェクト関連）

14:45-16:15 シンポジウム

16:30-17:52 映画上映 『河内山宗俊』 山中貞雄監督(1936年/35mm版ニュープリント/81分)

18:15-20:52 未公開作品プレミア上映

お問い合わせ

コミュニティシネマセンター TEL:050-3535-1573 FAX:03-3461-0760 <http://www.jc3.jp>

映画の上映

9月5日(土)

■会場：川崎市アートセンター アルテリオ映像館

特別企画「生誕百年 映画監督 山中貞雄」(シネマテーク・プロジェクト関連)

2009年11月8日は、山中貞雄監督(1909-1938)の生誕百年の日にあたります。

わずか5年の間に26本の映画を監督し、「天才」と言われながら29歳の誕生日を間近にひかえた9月17日に中国大陸に戦病死した山中貞雄。その映画でほぼ完全なかたちで残っているものは、『丹下左膳餘話 百萬兩の壺』(1935)『河内山宗俊』(1936)『人情紙風船』(1937)のわずか3本です。生誕百年を迎えた今年、東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて、玩具フィルムとして残された断片や脚本作品、さらには山中が中学時代に描いたパラパラ漫画までもプログラミングし、その全貌に迫ろうとする回顧上映が、山中の命日を挟んだ9月15日から27日の間に行われます。本企画は、現存する最良のネガから作成した『河内山宗俊』のニュープリントの上映と新世代のパネリストによるシンポジウムを通して、山中映画への新たなアプローチを提起する試みです。

■14:45-16:15 シンポジウム

青山真治 [映画作家/小説家]

1964年生まれ。立教大学映画研究会で自主映画を作り始め、助監督を経て、95年にVシネマ『教科書にないっ!』でデビュー。翌96年、初の劇場公開作『Helpless』で一気に注目を集める。2000年の『EUREKA(ユリイカ)』がカンヌ映画祭国際映画批評家連盟賞を受賞。その後も『月の砂漠』(01)、『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』(05)がカンヌ映画祭に、『こおろぎ』(06)、『サッドヴァケーション』(07)がヴェネチア映画祭に出品された。最新作はフランスに招かれて制作した短篇『赤頭巾』(08)。他に著書として批評集「われ映画を発見せり」(青土社)、小説「死の谷95」(講談社文庫)、「エンターテインメント!」(小説集・朝日新聞社)などがあり、小説『ユリイカ』では三島由紀夫賞を受賞している。

西山洋市 [映画作家]

1959年生まれ。「おろし金に白い指」(91)「ぬるぬる爛爛」(92)「ぬるぬる爛爛の逆襲」(92)「ホームビデオの秘かな愉しみ」(93)などTVドラマで演出を担当し、注目を集める。96年には劇場公開作『ぬるぬる爛爛』を発表。翌年には『痴漢白書劇場版II』が公開される。共同脚本作品として黒沢清監督『蜘蛛の瞳』(98)、塩田明彦監督『月光の囁き』(99)、がある。2004年には「映画番長」シリーズの『稲妻ルーシー』、『運命人間』が、2007年には映画美学学校高等科生とのコラボレーション作品『INAZUMA稲妻』(05)が公開され、話題を呼んだ。最近作には、ホラー映画『グロゾカ』(05)の他、映画美学学校修了生と共に制作した『死なば諸共』(06)、『吸血鬼ハンターの逆襲』(08)がある。

廣瀬純 [龍谷大学経営学部教員]

仏・映画批評誌「VERTIGO」編集委員。1971年東京生まれ。パリ第三大学映画視聴覚研究科博士課程中退。「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」元編集委員。著書に『闘争の最小回路』(人文書院)、『闘争のアサンブレア』(共著/月曜社)、『シネキヤピタル』(洛北出版)など。訳書にアントニオ・ネグリの著作『芸術とマルチチュード』(月曜社)『未来派左翼』(NHKブックス)や『マルチチュードの文法』(パオロ・ヴィルノ著/月曜社)など。

クリス・フジワラ Chris Fujiwara [国際映画批評家連盟Webマガジン編集長]

国際映画批評家連盟Webマガジン「Undercurrent」編集長。著書に「Jacques Tourneur: The Cinema of Nightfall」「The World and its Double-The Life and Work of Otto Preminger」等。2003年の小津安二郎生誕百年記念国際シンポジウムのパネリストとして初来日。第7回東京フィルメックスをはじめ、世界各地の映画祭で審査委員をつとめている。現在、喜劇俳優ジェリー・ルイスの映画作家として再評価する本を準備中。アメリカと日本を往復しながら映画批評活動を行っており、アテネ・フランセ文化センターでも連続講義「クリス・フジワラによる映画表現論—アメリカ映画における時間とパフォーマンス」を定期的に開講中である。

■16:30-17:52 映画上映

『河内山宗俊』 山中貞雄 1936年(35mm版ニュープリント/81分)

原作:山中貞雄監督 脚色:三村伸太郎 撮影:町井春美

出演:河原崎長十郎、中村翫右衛門、市川扇升、山岸しづ江、原節子

講談・歌舞伎でおなじみの「天保六歌撰」の映画化。山中貞雄は、自ら「マゲをつけた現代劇」と呼んだ大胆な脚色を試み、河内山宗俊もやくざな遊び人として登場する。河内山の盃を受けようとする三下奴の直次郎が北村大膳から盗みだした小柄をめぐって、六歌撰の面々が縫い合わされ、山中一流の語り口でストーリーが展開されていく。

未公開作品プレミア上映

「ヌーヴェル・ヴァーグの最も成功した作品」(フランソワ・トリュフォー)と評される『アデュー・フィリピーヌ』(1960-62)の監督、ジャック・ロジエ、日本でも一部の映画ファンに絶大的に支持されていますが、その作品が劇場公開されることはありませんでした。包括的な紹介が最も待たれる監督のひとりであるジャック・ロジエの長編3本に短編を加えたプログラムが、来年1月、遂に劇場公開されます。その中の1本『オルエットの方へ』をプレミア上映します。

■18:15-20:52

『オルエットの方へ』 ジャック・ロジエ監督 1969年 (162分)

ダイエットに勤むジョエル、その友人のカリンと従姉妹のキャロリーヌが、人気のない海辺へヴァカンスに行く。そこにジョエルに気がある上司や、ヨットに誘う青年が現れ、徐々に三人の関係に変化が起こる。